

一八八三年六月四日(月)

ドツキネーシヨル

南神村のカーリー寺院において、タクール、聖ラーマクリシユナ、信者と共に

果物祭りの供養日に南神村で信者と共に

ドツキネーシヨル

〔マニラル、トライローキヤ、ビシユワス、ラーム・チャトジェー、バララーム、ナレンドラ、ラカール〕

今日はジョイスト黒分十四日目、サーヴィイトリー十四日。(訳註1)新月には果物祭り(バラハリーニール・プー

ジャ)が行われる。タクール、聖ラーマクリシユナは、南神村カーリー神殿の自室で坐っておられる。ドツキネーシヨル

信者たちがタクールにお会いするため次々と入ってきている。月曜日で、英国流に言えばキリスト暦

一八八三年六月四日である。

校長は、前日の日曜日に来ていた。その夜はカーティヤヤーニー(大実母の別名)供養があつた。プーシヤタクールは神の愛に浸りきつて、舞堂ナト・マンデイルで大実母と向き合つて立つて話していらつしやつた。

大実母よ きみはヴラジャのカーティヤヤーニー

きみは天国 きみは地上 きみはかの地獄

きみの手にハリも プラマーも 十二のゴパールも

ドウルガーの十相も ヴィシユヌの十化身も

このたびは すがた どの相とりて我が前に来たるや

歌をうたい、大実母と語らい、タクールはもう愛に酔いしれていらつしやるようだ！ やがて自室に入られて、腰掛けにお坐りになった。

その夜はずつと夜更けまで、大実母の名を称えておられた。

月曜日は朝から、バララームはじめ他に数人の信者が集まってきた。バラハリニー・プーリヤ 果物祭りの供養のために、トライローキヤ(訳註3)ほか寺院の経営にあたる旦那方が、家族同伴で庭の方に来ていた。

時間は午前九時ころ——。タクールはニコニコしてガンジス河べりの円形のペランダに坐つていらつしやる。傍には校長がいる。ひざの上にタクールは、ラカールの頭をのせていらつしやる！ ラカールは気持ちよさそうに眠っている。タクールはここ数日、ラカールをゴパール(クリシユナの幼時名)

(訳註1) マハーバーラタのサーヴィトリの物語にちなんだお祭りで、ヒンドゥーの既婚女性はこの日、断食を行う。

(訳註2) パラハリニー——パラは果物、ハリニーは食べる者の意味で、カーリー大実母の別名。ジョイスト月の新月の日に、大実母が信者のカルマを消滅してくれるとして拝まれ、信者は果物を供えて礼拝する。

(訳註3) トライローキヤは、南神寺院を建立したラーニ・ラースマニの四女ジャガダンバと娘婿マトゥール氏との間に生まれた三兄弟の二番目。

と見なしておられるのだ。

トライローキヤが大実母カーリーに詣るため、正面を通り過ぎるところだ。従僕がこうもり傘を持つて従っていく。タクールはラカールにおっしゃる。「ホレ、起きろ、起きろ」

タクールはお坐りになったまま、トライローキヤがごあいさつを申し上げた。

聖ラーマクリシユナ「はいよ。ときに、昨日は芝居(宗教劇)をしなかったのかね？」

トライローキヤ「はあ、うまく準備ができなかったものですから——」

聖ラーマクリシユナ「過ぎたことは仕方がない。これからはこんなことがないように、氣イ付けておくれよ！ お寺の行事はいつもきまり通りにした方がいい」

トライローキヤは、タクールが満足しそうな返答をしてからそこを立ち去った。しばらくするとヴィシユヌ神殿の祭司、ラーム・チャトジェー氏がやってきた。

タクール「ラーム！ トライローキヤに、芝居の催しを抜かすなんてことは二度としないように氣をつけれ、と言ったところだが、こんなことを言ってもよかつたかな？」

ラーム・チャトジェー「先生、当然ですとも！ いいことをおっしゃって下さいました。いつも、決まり通りのことは催さなければなりません」

聖ラーマクリシユナ、こんどはバララームに向かって——

「おウ、今日はお前、ここで食べろよ」

食事のかなり前から、タクールはご自分の精神状態について、信者たちいろいろとお話しになっ

た。ラカール、バララーム、校長、ラームラル、そのほか、一、二の信者が坐ってお話を聞いていた。

〔タクール、聖ラーマクリシユナのハズラーへの怒り——人間に神を見る〕

聖ラーマクリシユナ「ハズラーが時々、わたしに説教するんだよ。『あなた、どうして青年たちのことばかり想ってるんですか?』ってね。馬車にのってバララームの家に行く途中で、急にこのことがかりになってきた。それで大実母マにきいたよ。『マー、どうしてナレンドラやほかの若者たちのことばかり、そんなに考えているのかとハズラーが言います。神様を想えばいいのに、どうして青年たちのことばかり想っているのかって、あいつは言うのです』こう言っているうちに突然、はつきり観みえたよ——あの御方そのものが人間になつていらつしやるといふことがね。汚いれのない容器いれものには、よけい鮮あざやかに顕あれているんだ。これを見てから、少し三昧が解けてきて——すると、ハズラーに対して無性に腹が立つてきた。あいつ、このわたしに惨めな思いをさせて——。それから又、思い直した。あんなアワレなやつを怒ってみても仕方がない。やつはなんにも知らないんだから」

〔ナレンドラと聖ラーマクリシユナの最初の出会いについて〕

「わたしは、あの若者たちがナーラーヤナの化身だといふことがよくわかっている。ナレンドラと最初に会ったときのことだ。この青年は、自分の身体に無関心だと一目見てわかった。わたしがちょっと彼の胸に手を当てただけで、外部意識を失ってしまった。気がついて立ち上がったから言うには

——『ああ、あなたはいつたい何をしたんです？ 私には父や母があるんだ！』ジャドウ・マリツクの家でも、これと全く同じことがあった。それからだんだん、彼に会いたくて居ても立ってもいられないようになってきた。もう命がけといつてもいい程になった。その頃、ボラナート(坂義雄)に私はこぼしたものだよ。——『ああ、どうしてこんな気分になつちまつたんだらう？ ナレンドラというカーヤスタ(三大知識階級の一カースト)の男の子のために、私の心はどうなつてしまつたんだらう？』すると、ボラナートはこう答えた。『そのことはマハーバーラタに書いてあります。三昧に入つた人の心が通常の意識に降りてくると、サットヴァ性の人と交わるのを喜ぶ』と。サットヴァ性の人を見ると心がさわやかになる』と』この言葉を聞いて私は、やつと安心した。時々、ナレンドラに会いたさのあまり、サメザメと泣いたものだよ』

昔の話——聖ラーマクリシュナ、愛のよろこび、様々な顕現を見ること

聖ラーマクリシュナ「ウーン、まったく大変な境地を通つてきたよ！ はじめて経験(三昧見神)したときは、昼も夜も区別がつかなくなつた。みんなは、気が触れたんだ』と言つていたつけ。それで、それ、みんなは嫁をあてがつた。気狂いみたいなもので——はじめはこう考えた。嫁さんもこんなふう暮らして食べていくだらう、なんてね。舅(シヤト)の家に行つたら、そこで大がかりなキールタンをした。下男やいろんな種類の人が集まつてきて、そりゃあ盛大なキールタンだつた。時折、これから先どうしたらいいかと思つたものだよ。それからマー、地主たちがわたしを敬うようならわたしの悟りは本物だ、

と言ってみたり。それも又、向こうからやってきて話をした」

〔昔の話——美しい少女や生娘の姿をした女神の礼拝、ラーマ劇を見たこと、要塞広場で軽気球を見たこと、シオルで牛飼い少年といっしょに食べたこと、ジャンバザールの家でマウトール旦那といっしょにいたこと〕

「まったく、大へんな境地だった。ちよつとしたことで、すぐ(霊の意識が)興奮するんだよ。それは、それは美しい女神を拜んだよ！ 十四になる少女だ。見るとそれが大実母の化身なんだ。お賽銭をあげて拜んだよ。

ラーマ劇を見に行つた。すぐに、これは本物のシーター、ラーマ、ラクシユマナ、ハヌマーン、ヴィーシヤナだということがわかつた。芝居をしている一人一人を、わたしは拜んでまわつたよ。

生娘クワリたちが来るとさつそく拜んだものだ。大実母の化身だからね。

ある日のこと、バクル樹の下に青いサリートをまとつた女が立っていた。売春婦だった。とつぜんシーターのことで胸がいっぱいになった。もうその女はどこへやら、本物のシーターがランカーの地から救い出されて、ラーマのところへ帰るところになった。長い間外の意識をなくして、三昧境にあそんでいた。

(原典註) ボラナート・ムコバッダエはカーリー堂付きの寺僧で、後に寺の出納係になった。

またある日のこと、要塞広場(マイタイン公園)をぶらついていた。軽気球が上がるらしくて、大ぜい人が集まっていた。とつぜん、一人のイギリス少年が木にもたれて立っているのが目に止まった。体が三カ所曲がっていた。それを見たとたんに、クリシユナを思い出した。そして、すぐに三昧になった。シオルでは、牛飼いの少年に食べさせてやった。ひとり一人にそれぞれ、手渡しでおやつと飲み物を渡した。彼らをヴラジヤ(プリンターヴァンの辺りの土地)の牛飼いだと思ひ込んでしまったんだ。そして、彼らからおやつをもらっていっしょに食べたよ。

ほとんど、外のことを見分ける意識がなかったね。シエジヨさん(マトゥール氏のこと)がジャンバザールの邸に連れて行ってくれて何日か世話してくれた。その間に、わたしは自分が大実母の侍女になつたと思ひ込んだ。その邸の女たちは、わたしの前ではちつとも恥ずかしがらなかった。まるで小さい男の子か女の子みたいに感じていたらしくて、ぜんぜん恥ずかしがらないんだよ。女中にくつついて——旦那さんの娘を、ムコさんのところに寝かせに連れていったものさ。

今でもちよつとので興奮する。ラカールがよくブツブツつぶやいて称名するが、それを聞くともうじつとしていられないんだよ。たちまち神様の雰囲気に圧倒されてしまう」

タクールは修行の一段階として、自らを大実母の侍女、つまり女性とみなして生活していたときのことを語りはじめられた。「わたしはキールタンの男の歌い手の相手をして、女歌手の真似をしたことがある。男歌手は、『仕草といい、声色といい、まさに絶品です。いつたい、どうやって覚えたのですか』と言ってさんざ褒めてくれたよ」

こうおっしゃってタクールは、キールタンの女歌手の真似を皆の前でしてみせて下さった。一同、笑いをこらえることは到底できなかった。

マニラルたちと共に——タクールは無条件、無辺際の慈愛の大海

食後、タクールは少し休息されている。熟睡ではなくウトウトまどろんでいらつしやる。そこへブラフマ協会の古い会員であるマニラル・マリツクが入ってきてお辞儀をしてから席に着いた。まだタクールはウトウトしておられる。マニラルが一言二言話しかけた。タクールは半睡状態で、ときたま何か答えておられる。

マニラル「シヴァナートは、ニティヤゴパールのことを大そうほめておりますが——非常に高い霊的状态だと申しましてね」

タクールはまだウトウト、目はふさいだままである。「ハズラーのこと、みんな、何て言ってる？」と聞き返されながら、起き上がってお坐りになった。それからマニラルに向かって、バヴァナートの信仰について話された。

(訳註4) クリシユナは体の三ヶ所(首、腰、膝)を折り曲げた独特のポーズ(トリパンギ)をとるが、これはクリシユナを慕い愛する人々をクリシユナ自身も愛し、どうすればその人たちが幸せになるかという想い(愛)がクリシユナの体を曲げているとも言われる。この愛ゆえヴィシユヌ神の化身であるクリシユナは、愛の化身とも呼ばれる。

聖ラーマクリシユナ「アハ、あの様子！ 歌をうたいだすとすぐ目から涙がこぼれるんだよ。ハリシユを見るとまたすぐうっとりする。ハリシユは幸福だと言ってね。ハリシユは家を離れて時々ここに泊まることができるからって」

次は校長に向かつてきかれる。「ところで、あれだけの信仰はどこから来るんだろうな？ バヴァナートのような年の若い連中が、どうして靈に目覚めるのかな？」

校長は黙っている。

聖ラーマクリシユナ「わかるかい？ 人間は外から見るとみな同じに見えるが、ある人々の内部には煮詰まったミルクが入っているんだよ！ プリ(揚げパン)の中には、中に豆の煮たのが入っているのもあれば、砂糖で煮詰めたミルクが入っているものもある。だけど、外見はおんなじだ。神を知ろうという希望ねがいや神を愛そうという信仰を持った人は、練乳コンデンスミルク入りのプリだ」

〔グルの恵みによる救済、そして本性を見ること——タクール、恐れることはないと保証して下さいる〕
今度はタクールは、信者たちを安心させて下さる。

聖ラーマクリシユナは校長に向かつてこう話される。

「ある人たちはこう思っている——私はきつと、智慧とか信仰とかいうものを持ってないだろう、私は所詮、この世に縛られた魂なのだ、とね。グルの恵みがあれば何の心配もいらぬよ。山羊の群れに牝虎が襲いかかった。跳びかかった拍子はちに胎の仔を産み落としてしまった。牝虎はそこで死に、仔虎

は山羊の群のなかで大きくなった。山羊は草を食べるから仔虎も草を食べる。山羊がビャービャー鳴くから仔虎もビャービャー鳴く。仔虎は随分大きくなった。ある日、その山羊の群にもう一びきの虎が襲いかかった。彼はそこに草喰い虎がいるのを見てびつくり仰天した。それで山羊は放っておいて、その草喰い虎をつかまえた。虎のくせにビャービャー情けない声を出して震えている。そいつを水の際きわに引っ張ってきた。『見ろ、水に映ってるお前の顔を見る。おれとそっくりだろうが』それから生肉を持ってきて、『これを食べ』そう言つてムリヤリ食わせた。いやがつてビャービャー鳴いていたが、だんだん血の味が分かつて自分から食べはじめた。新来の虎は言つた。『分かったか、おれもお前も同じものだ。さあ、おれといっしょに森へ行こう』

というわけで、グルの恵みがあればもう何も恐れることはないんだよ！ その御方は、お前は誰なのか——お前の本性は何なのかを知らせて下さるからね。

すこし修行をすればグルが教えて下さるけれど、コレだ、とね。そうすると、弟子は自分でわかるようになるよ。どれが本当でどれがウソかを。神だけが本当の実在で、この世は一時のはかないものだ」

〔修行のまねごとでも良い——肉体をもったまま解脱して世間に住むこともできる〕

「一人の漁夫が、夜こっそり或る庭園に忍びこんで、池に網を投げて魚を盗み取りしていた。持ち主が気が付いて、かなりの人数をやつてその男をとり囲ませた。タイマツを手に手に、魚泥棒を探し回つ

た。一方、漁夫は灰を体中になすりつけて樹の下に修行者の真似をして坐っていた(訳註——インドでは、修行者は灰を体や顔にまぶしている)。追っ手どもはいくら探しても漁夫などというものは見つからない。ただ樹の下に灰をかぶった修行者が一人、座禅しているだけ。次の日、あの庭園にえらい聖者がいる、ということがあたり一帯の人に知れわたった。人々は花や果物や菓子を持って修行者にあいさつにやって来た。大ぜいが銀貨や銅貨の賽銭を修行者の前に投げた。漁夫は思ったね——『こりや大変なことだ！俺はほんとの修行者じゃない。それなのに連中はこんなに敬ってくれる。じゃ、本物の修行者になったら、間違いなく神様がわがものになるだろう、きつとそうなる』

人をだますための修行でもこんなふうに霊の目覚めが起こった。本気で修行をしたらどうなるか、言うまでもないことだ。どれが実在でどれが非実在か、きつとわかるようになる。神だけが実在で、この世はほんの一時の影だ」

一人の信者は心に思った——この世ははかないものだった？ その漁夫は世間に見切りをつけたかもしれない。だが、実際この世で生活してる人たちはどうしたらいいのだろうか？ その人たちも社会生活を断念しなければいけないのか？ 聖ラーマクリシュナは無条件、無辺際の慈悲の大海である。すぐに、その信者の胸の内を見抜いてこうおっしゃった。「もし事務員が監獄に入れられたら、もちろん、監獄の中で暮らすわけだが、じゃ監獄から出されたら、どっかの道端でシヤナリシヤナリと踊りでも踊っているかね？ そうじゃないだろう。また事務員の口を見つけて前と同じ仕事をするよ。グルの恵みで真理の智慧を獲た後でも、^{からだ}身体を持ったまま解脱した人(ジーヴァン・ムクタ)として世

の中で暮らしていくよ」

こうおっしゃって、タクール、聖ラーマクリシユナは俗世にいる人の恐れをなくして下さったのである。

聖ラーマクリシユナ、マニラルたちと無相の实在かみについて語る

マニラル「毎日の礼拝には、どこに精神を集中してあの御方を瞑想したらよろしいでしょうか？」

聖ラーマクリシユナ「胸は大そうすばらしい場所だよ。そこに集中して瞑想するといい」

〔信がすべて——ハラダリの無形神に対する信念——シャンブーの信念〕

マニラルはブラフマン智を求めている哲学者で、従つて無形神論者ニラーカーラパディである。タクールは、彼に向かつて語りかけておられる——

「カビールはいつもこう言っていた——形ある神はわが母、形なき神はわが父、どちらを責めよう、どちらを賞めよう。天秤はかりの両皿、重さは同じ！」

ハラダリは昼間は形ある神を拝み、夜は無相の神を拜んでいた。どちらをとるにせよ、正しい信念があればそれでいい。形ある神を信じるのもいいし、無相の实在を信じるのもいい、だが、正しい信念を持つていることが必要だ」

〔昔の話——初めての法悦境——あの御方がなさるのか、それともただの偶然か?〕

「シャンブー・マリックはバグバザールからここにある別荘までいつも歩いてくる。誰かが、『こんな遠い処まで歩いてくるのは危険だから、馬車で来ればいいのに』と言った。するとシャンブーは顔を真っ赤にして叫んだよ。『何だと、あの御方の名を称えて出てくるんだぞ、危険だなんて!』——信念があればすべてが成就する! わたしはよく言ったものだ。もし誰それに会ったら(自分の霊的体験が真実だとしよう!)——寺の出納係の誰それが、もし自分に話しかけてきたら! そう思うと、きつとその通りのことが起こったものだよ!」

校長は英国の論理学を学んでいる。朝方の夢が実際の出来事と符合する、というのは迷信の所産であると錯誤論法の章に書いてあるから、タクールに質問した。

校長「そうでございますか。でも、或る場合にはそれが起こらなかったという場合がございますでしょうか?」

聖ラーマクリシユナ「いや、みんな起こったよ。あの御方の名を称えて信じていたら、必ずその通り起こったよ! だがね、マニラル、真っ直ぐで広い大きな気持ちを持っていなけりゃ、こういう信じ方はできないものだよ。

骨ばった体、くぼみ目、すが目(斜視)、こんなふうな特徴が沢山ある人は、どうも素直に信じることができないようだね。『南にバナナの木、北にはパイ(つる草)、おまけに黒い猫が一ぴき、これじゃ私は何にもできない!』(一同笑う)(訳註——俗信として、これらすべて、あまり縁起のよくないものとされている)

〔老女中バガヴァアティーに対する慈悲〕

夕方になった。女中が入ってきて部屋に樹脂香を焚いていった。マニラルたちが立ち去ったあと、一、二の信者がまだ残っている。部屋は静かだ。香のけむりが漂っている。タクールは小寝台に坐っておられる。そして、大実母を想っていらっしやるのだ！ 校長は床の敷物の上に坐っている。ラカールもいる。

しばらくして、寺院の持ち主の女中のバガヴァアティーが入ってきて離れたところからお辞儀をした。タクールは坐るようにとおっしゃった。バガヴァアティーは随分古い女中である。長い年月、旦那の家で働いていた。タクールは彼女と長年の顔馴染みである。初めのころはあまりいい性質の女ではなかったが、タクールは慈悲の海、すべての汚れを清めて下さる。彼女とあれこれ話を始められた。

聖ラーマクリシュナ「お前も年をとったね。稼いだ金で修行者やヴィシュヌ派の人たちに食べ物のお供養をしているかね、え？」

バガヴァアティー、ニンマリと微笑んで――

「そんなこと、申し上げられますか？」（訳註――肯定の意。インドでは自分の徳行を口にだして言わぬ方がいいとされているので――）

聖ラーマクリシュナ「カーシーやプリンダーヴァンにお詣りに行つたかい？」

バガヴァアティー、肩をすくめて――

「そんなこと、申し上げられますかしら？ 沐浴場を一つ造りましてね。その大きな石に私の名が刻んであるんですよ」

聖ラーマクリシユナ「何が刻んであるって？」

バガヴァティー「はい。私の名前が刻んでありますの——聖なる侍女バガヴァティー——って」

聖ラーマクリシユナ「ハハハ。よかった、よかった」

このとき、バガヴァティーは勇気を出してタクールに近づき、お足に触りながらお辞儀をした。

サソりに咬まれた人は、ビクンと立ち上がって不安そうにガタガタ震えているものだが、ちょうどそんなふうには、聖ラーマクリシユナは落ち着かぬ様子で『ゴーヴィンダ、ゴーヴィンダ』と口走りながら立ち上がられた。部屋の隅にガンジス河の聖水を入れるための瓶がある。幸いまだ水がある！ ハアハアしながら大急ぎでその瓶のそばに行かれ、女中に触られた場所をガンジスの聖水で洗いはじめられた。部屋のなかにいた信者たちはびっくりして、啞然としてこの光景に目を奪われている。女中は悄然と死んだようになって坐っている。慈悲の大海、すべての汚れを清めるお方、タクール、聖ラーマクリシユナは、女中をなぐさめて大そうやさしい声音でおっしゃった——「何もしないで、お辞儀だけおしよ」そして再び座につかれ、女中にいまのことを忘れさせようと努めておられる。「さあ、歌をきいとくれ」とおっしゃって、彼女に歌をおきかせになるのだった。

よらこび
歓喜にみちて我が心の蜂

シャーマの御足の青き蓮華
シャーマの御足の青き蓮華
カーリーの御足の青き蓮華

御足は玄く、蜂も黒く

玄と黒ひとつになりて

さまざまの深き理ことわり

また見えつ また幽かくれつ

カマラーカーンタの胸にいただけ

その希ねがいもいつか満たされ

苦も楽も一味妙なる

歡喜よろこびの海に泳ぎ入るなり

(次の歌)

シャーマの御足もと 大空たかく

私の心の風は翔けていた

カマラーカーンタ——ベンガルの詩人

よこしまな風をまともにもうけて
急にかたむいて 落ちてしまった

煩惱の荷物は 重く切なく
心の凧はもう上がらない
妻子のしがらみを抜けようと
もがけばもがくほど破れ傷つく

智慧の頭はかたく重くなり

無理にとばせど 石のように落ち

付き合っていた六人の仲間に

私はとうとう負けたのか

信仰の紐でしっかり結んで

勝負に來たつもりが途方にくれた

ナレスチャンドラは泣き笑いして

「やっぱり來ずに一人でいればよかつた」

六人の仲間 || 六つの敵 — 色欲、怒り、貪欲、
高慢、嫉妬、愛着

第21章 ドゥキネーショル 南神村のカーリー寺院において信者と共に

(次の歌)

汝みずからのうちに棲みて

心よ 他の家に行くなかれ

かの鍵もちいて静かに坐り

汝みずからの奥を探せよ

まばゆきこがね黄金も マニ宝珠も

かの鍵あれば手に入らん

尊きたま宝玉は数知れず

わがおもい想念の庭に散らばる